

日本百將傳一夕話

一

2324

To my dear Mr. L. Harris
from N.S.

日本百將傳一夕話

日本百將傳一夕話序



浦安の浪のたひらき草紙系中
伴國^{ツ又チ}内に生るる青人草のたひらき
下^{ヤソツキ}指八十系八百系番の武士八十
氏川の流れたるは有斗流柳昔の
近き世の人々の強波津れをの案^{フル}
初^{マヒ}を那^ナのたひらきとて我殺多のた
ふ彼のたひらきとて我殺多のた

のちも拙作をかへりてあつたふ
那き侍るあまのこも

あひあといふふれふあ

あひあといふふれふあ

柏園のちり

うきあ

あひあ

自叙

和漢三才圖會載林道春先醒者謂童
名於菊松丸焉藤原信時之子也爲伯
父理齋吉勝之養子孩提岐嶷讀書年
甫八歲側有人讀太平記者聞之能暗
人感其記憶不_レ凡十三歲而改名又三
郎信勝入_二建仁寺大統菴就_二古間長老

陀珥霧伽幣流比苦菟麻菟阿波例比等菟麻菟比苦珥阿利勢磨岐曲辰岐勢摩
之場多知波閼摩之場かくて尊の心腹いよく甚るるありけり。能療野といひ
不ぬ。かの倭小せる蝦夷人といひ勢の御宮小奉て。吉備の武彦と系師小登一就小
皇命と傳て東小なる越え順いぬ荒る神と悉く平げつ。帰路小及びて此處と
眞く入るえ奉て親くことと言さんとすこと。天命忽々小ふて。隨狹傳め難し。
故に八曠野小外と。誰小る後王惟小る昔ん周て武彦とまづ登りて。ことと奏し
つと云ふけり。父の帝也。大不是と歎さる。則別小使と立て。その疾と訪め小就小病
危急小迫て。竟小能療野小薨下る。比歳于癸三十ありと。上下奉て惜とありて

日本武尊の圖賛いよく

刺強虜風稱雄揮寶劍回炎風短折雖福不終禮贈與至尊
同

崇神帝の皇子
豐城命
子彦狹島王
子御諸別王
豐城命の母
木国造荒河刀辨
が女遠津年魚目
目微
上毛野居下毛野
居ノ祖といふ

御諸別王

人皇十代 景行帝の時の人
嘉永六丑造 千七百十四年戌

御諸別王者出自 崇神帝子

豐城命仕 景行奉命領東州

擊蝦夷取其地

崇神帝 皇子豐城命。及活目尊と勅を。何とて天業と嗣を
といふこと決せ。你達と愛とて是と定めんと命。故不沐浴之。外あり。此の
日及て以て。父帝小なる豐城の御請ふ小食て。東小向て八回捨て弄。八回
刀と擊と足あり。活目尊の比方小細と張。栗と食者と逐と見え。小不於て。帝
を愛小合せ。活目尊とて皇太子とす。豐城と以て東國と領。いよく

御諸別王の詔

この王の出自は前より父彦狭島王の性質温順あり。よく朝廷に仕え上と致ひ下と憐む周く景行帝の五十五年二月東山道十五國の都督不拜し。既小任まへ赴くと進発しある時小任は春日の穴咋の邑小玉に病小付しと云ふこと能くは家族集會て看病すると御等困るゝと云ふこと天令ら不取しと云ふこと。下東山の百姓皆彦狭島の仁徳と云ふは彼君ら小の都督さういふことあるに政のあるべきこと。いひあひに教びて其下向の目と俟ける小斯のふことありと云ふこと考批と云ふこと。春日の郷小玉に。そのこと乞けと云ふこと。既小玉に薨下ありと云ふこと。彼処へ體と送るべき。所謂ありと云ふこと。百姓皆小玉と失ひ然いと云ふこと。當小取らんやと竊小玉の尸と盗む。復還して上野小玉に。數く葬りたまふ。その仁徳の大有る

この一事とりて察するべし。小玉に於て聖五十六年。

天皇御諸別王の詔あり

ける。汝が父彦狭島王。住所へ向ふと云ふこと。既小薨む。然る小玉の百姓皆仁徳と慕ふより。然る小玉より汝をさへ。彼小玉を願むべしと云ふこと。小玉に御諸別王天皇の命を承父の業を嗣と云ふこと。欽比車小東玉へ下向して。普く仁政を施し。よくその國を治めり。然る小蝦夷の怨望あり。猶仁政の行も届らば。いまだ王化小服せざむ。云頼元景の流多く。動もまじく。援私小おと。ある時。小蝦夷人等。發援をさし。吹えけむ。則と云ふこと。仁さんと云ふこと。東玉の勢と募り。自諸軍小將と云ふこと。大玉無勢と云ふこと。攻撃あり。元来玉の仁徳小懐さ義と云ふこと。金鉄の重さ小比し。今と云ふこと。輕小は玉を兵ども小てあやけむ。擊ども射まじ。更小屈せむ。石壁鉄城と云ふこと。二玉三玉攻入けむ。蝦夷の賊等大玉怖る。その糾將を足振邊大羽振邊と云ふこと。等陣小来玉。願と云ふこと。罪と云ふこと。謝と云ふこと。其狀赤心あり。敢て愛非小ありと云ふこと。



東の民
徳と慕ふ
彦校の
棺と
奪ふ

と殺とある。その事蹟もよく致ふべし。治てことと野史を索め。その妄誕を傳えんと。杜撰の甚しきものあり。引て考証を備ふもの。但しその命の名。且比古多須美知能宇斯王とある。丹波と平治せし後。かく称するやある。初めよりその名あり。丹波(遣)より。もと東山と称す。丹波との考れ。さう。その名もさう。蓋 綏靖より。同化を。その事蹟もよく致ふべし。所引。本朝通紀 安寧天皇の條。謹按日本書紀。自綏靖帝至于同化帝。凡八帝歷歳三百八十餘年之間。僅載即位立后立太子崩殂遷都之歲月。欽政事行迹之委曲矣。可惜哉。及入鹿之焚。天皇記史記亡不傳焉。舍人親王遇得灰燼之余。簡而撰日本書紀。至文獻之不足。則無奈之何也。後世雖多所載。雜策之異事。亦非正說。故欠不載。奉潛隨古人。妄不語怪不傳疑之意者也。呼嗜書好古之人。孰不歎息乎。と云々

上毛野八網田

八皇十代 垂仁帝の時の人
嘉永六丑追 十八百六十五年三戌

上毛野八網田者 垂仁天皇時狹穗

彦救八網田奉勅討之焚城狹穗彦

焚死 天皇賞之賜名日向武日向

八網田の話

垂仁帝位不即。二月二年春二月。狹穗彦と云く皇后となり

の誓津別命と云く。天皇珠を愛し。常におたねおたね

あふ皇后狹穗彦の兄狹穗彦王といふ人あり。妹の勢ふ。憑藉し

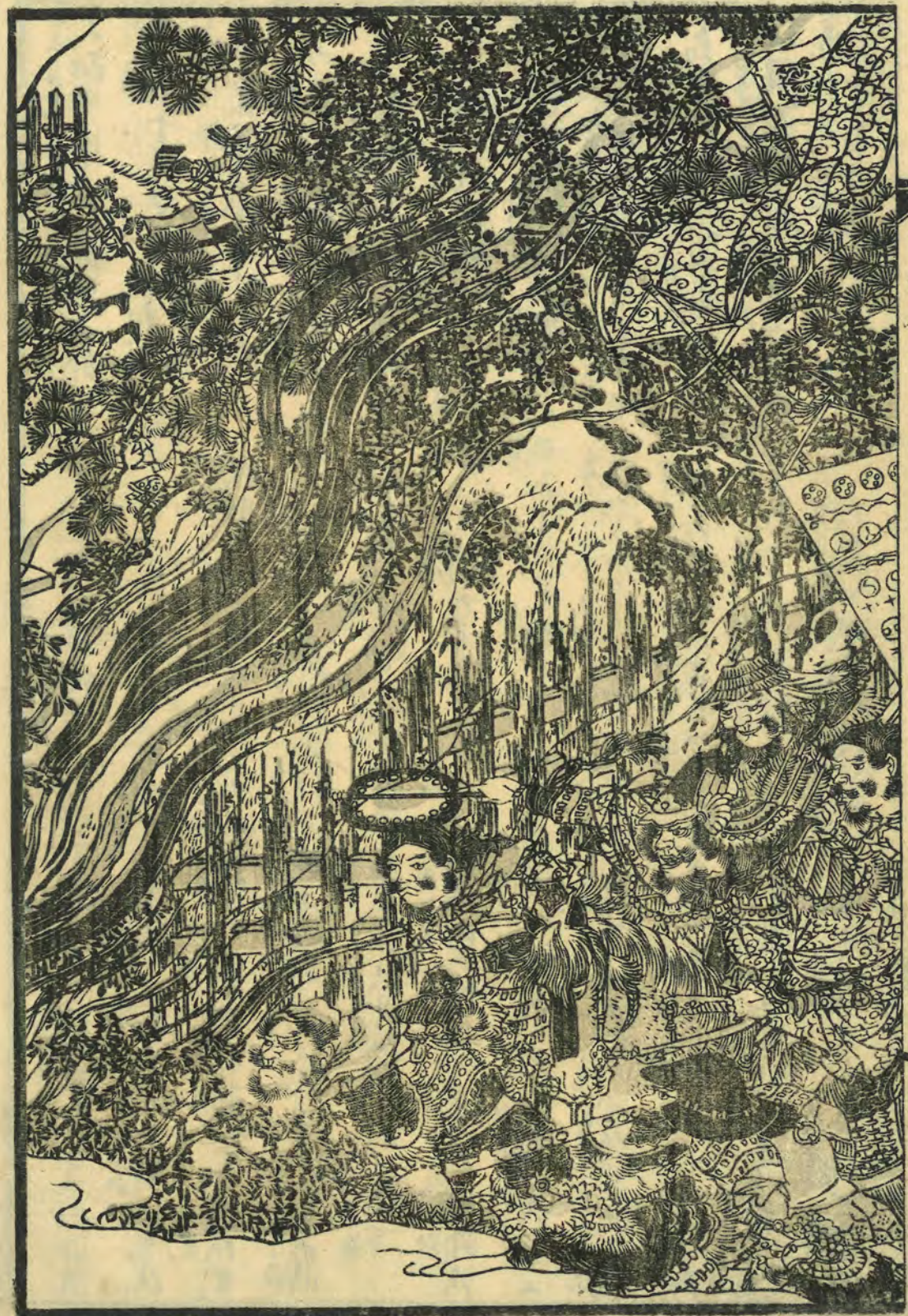
群小驕と云く。その威格盛なり。然ととも猶驕ふ。帝と傾け

狹穗彦ハ
同化天皇の子彦
坐王のふみ道主
命の同胞あり

八網田は出自群
あふ八網田は
上毛野居遠祖と
あり

奉^{ほう}ず。自^{みづか}ら天^{てん}位^ゐお界^{かい}らんと様^{よう}で。容^{ひそ}お便^{べん}宜^ぎと候^うひけり。一^{いつ}時^{とき}後^{あとの}徳^{とく}親^{しん}と一人^{ひとり}居^い
まへて見て大^{だい}お歡^{かん}び傍^{はた}近^{ぢき}く進^{すす}こようぞ。おまふ向^{むか}てりるす。女^め兄^{あに}とまとい執^{しやく}
う親^{おや}しくもををどやと。同^{どう}まで皇^{こう}后^{ごう}御^ご元^{げん}あり。その兄^{あに}こそ勝^{まさ}りさとし。とり人^{ひと}と唆^そて後^ご
徳^{とく}彦^{ひこ}い。まづそえと得^えたりと歡^{かん}びをも色^{いろ}とりてをせざるハ色^{いろ}衰^{おとろ}へて野^の池^ちひこれ
古今^{ここん}の人^{ひと}情^{じやう}なり。今^{いま}天下^{てんか}お美^み人^{じん}多く進^{すす}て帝^{てい}お媚^{めい}と求^{もと}む置^{おき}永^{なが}るおまといて居^ゐ
の彩^{さい}と承^{しょう}るとぬんこと。鴈^{かり}祚^そお登^{のぼ}らば。汝^{なんぢ}と共^{とも}枕^{まくら}と高^{たか}うして百^{ひゃく}年^{ねん}の娛^ぐ樂^{らく}と極^{ごく}
めん。まふ快^{かい}さとありむや。故^{ゆゑ}お今^{いま}らの匕^し首^{くび}と授^{あた}く。汝^{なんぢ}帝^{てい}の間^まと藏^{くら}ひ是^{こゝ}より利^き殺^{ころ}
まふ。然^{しか}まづうち皇^{こう}位^ゐお界^{かい}す。汝^{なんぢ}と重^{おも}く賞^{しょう}せんとして懷^{なつ}より匕^し首^{くび}と把^と出^だす。是^{こゝ}
と后^{こう}お興^{きやう}えけまふ。后^{こう}いひさ之^{こゝ}より戦^{いくさ}慄^{うれ}きて更^{さら}お對^{たい}する術^{すべ}もなげば。お公^{こう}と速^{すみ}お
練^{れん}らんと思^{おも}ひまうと。兄^{あに}の威^い勢^{せい}ありくお練^{れん}めて止^{とど}まる氣^けふあわねば。かの匕^し首^{くび}とうけ
把^とて被^ひお隠^{かく}して別^{わか}れぬひ折^{おり}たりて兄^{あに}が心^{こゝろ}と被^ひさせんと思^{おも}ひたり。若^もお今^{いま}の宮^{みや}所^{ところ}。

大和玉城上郡。纏向小都と作るとして珠城宮といふ。とあるん常の山殿に在り。とある五
 年冬十月。来目くめ大和大和小市小市より来て高たか官官大和大和小居小居する時。天皇酒酒小醉小醉とあり。
 皇后の膝ひざと枕まくらとて。あはれく同睡どうすいのひたり。皇后の時熟ときじくと。帝の寐教みけうとあり成なりを。
 かかの兄王あにのみことが詔みことへ。い當あたふあのとあるべし。若物わくもの小相さう入い帰かへあやと。犯おとさんとすべしとの時。
 あり。嗟あはれ怖おそしと身みと慄おそりて不ふ言ごふ涙なみだと隨したがひあり。帝の山やま教けう小憐れん然ぜんとある。當下たうげ
 帝の眼めと用もちと朕怪みづからとと愛あいととあり。何いか方かたよりいと少ちさる郷色きやうしきの蛇へびとく来きつて。朕頭みづかぶ減へ
 繞めぐふと思おもへ。秋穗あきほの方かたより。大雨ひさめあやとと面おもてと濡ぬれとと。何なんの祥さかあゝん故宜こぎよく考かうてふ
 と大おほ小こ孩わらわく宜よろこひたり。皇きみ后ごへ脱だつふ落おちる涙なみだと密ひそ小こ拭ぬぐひて在あり。その時ときお及およびて大おほ小こ孩わらわ
 ト身みと反そむけてそ処そこお伏ふきひ云いふ兄王あにのみことの急いそ進しんと云いふふ小こ似にて罪つみも深ふかいといふとす。
 社稷しやくと憂うれふ因よて妻つまが進退しんたい谷やより。一ひとさびに則すなは懼おそれと一ひとさびに則すなは悲かなむゆ何なんともある所ところあり。
 然しかども兄王あにのみことの无道ぶどうふ其そのて。天皇てんかうを弒ころし。社稷しやくと危あやふするふ悲かなむと。その在あり状ようと言いふ。



百將傳 一ノ巻 二ノ巻

三ノ巻 四ノ巻



上毛野八綱田
討つて
むら
狄徳彦
誅殺

周より人使穂媛皇后の彦々所の養津別の皇子是より言ふに脱事
二十ふより八柳の尊養生ふとも猶注と小児の如し。天皇は是を愛ふひ有
小訴して何の故ぞと強し人。二十三年冬十月 天皇大庭にお立ち内鳴鶴を大
虚をこする。養津別是と親ひ忽ちお言と發し。是何の如ぞと宣ふ天皇々々
の鶴をこして言ふと大お喜び左右の臣お詔し。誰よりかの鳥を捕へて献らんやと
あせけき。天湯河板奉よりるの臣捕へて献らんと遠く鶴を運ふて。就
お出のふより。かの鳥を捕へ得たり。十一月二日おあひつて則と是を
献りけり。天皇深く愛ふひ則皇子お興え人ひ養津別是と喜び言ふ人
より常人の如し。因て湯河板奉と教く賞し。則と鳥取遣と賜ふ因て鳥取智
養部養津部と定むとりて

武内宿稱

皇統より十代まで 仁德帝の時薨じ
嘉永六丑追 十四百五十二年成

武内宿稱者紀氏之祖也歷仕

景行成務仲哀神功應神仁德六

朝享年三百餘歲其間為棟梁臣

為大臣神功三韓之役調護之勞

最多又攻殺忍熊王

又
古事記お概お
孝元天皇 伊賀
迦色許賣命と
娶て比古布都押
之信命と生し
あの命宇豆比古
之妹山下影姫お
娶て建内宿稱と
生ると見えり

あの卿古事記と日本紀と異同あり。古事記の比古布都押之信命の
みより日本紀の孫といふも孰れ是を考ふべき

武内宿禰の詔

この卿性質聰明なり。義膽直実あり。景行天皇五十一年。正月七日。大内子祥
 臣とめり集へて大内宴と賜ふとあり。時小皇子稚足彦尊及武内宿禰と見え
 天皇とて訝りひりてその故と問ふ。こふちて奏しといふ。羣臣宴樂を賜
 の日。その情遊戯に在り。敢て國家の事を思ひて。若狂生あやて。牆隙の隙を伺ひ
 うと。門下小在り非常小値ふ故小宴席小連らびと。帝とて大内賞て。それ
 赤心とせしむ。その秋八月。日小及び稚足彦尊とて皇太子とす。武内
 宿禰とて以て棟梁の位とす。按ずる小棟梁の二字。和刻無那哉。宇津波利と
 り。屋敷と違ふ。この二本を則ち頂上小置く。さうが棟梁の位といへるも。結官の
 上小置の謂ふ。秦漢の世小相國とらひ。さう相丞といへる。是く稚足彦尊小即ちさう
 三年春正月。武内宿禰とて大内とす。

と同日あり。周てその帝武内と殊に窮しと爲り久とぞ。かくて 成務帝天下
 と知しめひき。云十年ありて一百七歳にて崩しあり。その治世のうちに遠里を遠く
 至つていも王化お服せざるを歎くせり。凡そ國郡お君長あり。縣邑お首あり。散
 ありとて。武内の大内等と殊に多し。國郡お長と置き。縣邑お首と置き。且旂矛と
 賜ひて表とあり。山河と界ひ。國縣と分ち。所隔お陸ひて。邑里と定め。東也と日繼
 とし。南北と日横と。山陽と影面とあり。山陸と背面とあり。その小於て百州安居し。天
 下更お事ありとぞ。その帝皇ふる久あり。日本武尊の弟二子足仲彦とて。太子
 とあり。則ち神位お即ありて。とぞ。仲哀天皇とまうり。氣長宿禰王の女とて。皇
 后とあり。とぞ。氣長足姫とあり。神功皇 かくて 天皇位お即あり。武内宿禰大
 臣えのめし。二年お越前角鹿お出せり。行宮と興て。箭服官とあり。他いふは。天皇の
 内もの栖まりとあり。弘へて。波多ひて。角鹿お出せり。又南紀の木槌勒津お幸まひ。とて。或人の説より。とて。

出雲の振根謀て
 牙飯入根を
 殺す



百将傳

君玉堂藏



百将傳

君玉堂藏

いふふと果す所を振振頻にふた刀うち揮ひ、竟小坂入根と斬殺し。かの恨とて
 晴しうらふ小坂にその弟甘美韓日狹き子鶴濡漣の二人を喰大に殺さ
 七期延ふ未だ。ふのことと奏せしう。帝大に逆驛あり。即武漣川別と吉備津
 表の兩將並小坂向ふ。出雲の振振と謀るべきや。詔命の下しう。ふね軍
 畏ふ。頻小坂洛と進發す。日あふに出雲へ到る。是に振振はふのこと
 傳えさ。公中頻に小坂をさ。かの兩將が勇悍ある。敵がふた刀うち
 今更ふとと來ねて。此地小坂に雄し。かすドと人数を集め地利を謀
 る。その官軍と防ぐと。ふと。元來衆寡敵がさ。皇天のさう无道小坂
 せん。竟小武漣川別と存備津彦の兩將のさふ小殊さ。と國中平定しう
 けり

日本武尊やまとむすね

人皇十二代 景行帝の時の人
嘉永六丑追 千七百二十八年三戌

日本武尊者
景行帝之太子也

景行帝之太子也

西征東伐以平閩國涉方弁世

ボツ
ミ
チ
ニ
シ
方
弁
世
キ
ヤ
イ
ニ
テ

其靈為神

尊の第三子と
足仲彦命と云ひ
成勢天皇の太子
と云ふあり
仲哀天皇と号ひ
應神天皇の御又
あり 仲哀帝御
父不月て身長十
尺と云ふ

景行天皇第二の皇子あり。御母も播磨摘目大御姫吉備津彦命の
 女あり。かくいと君懼又もあ。故小初めの此名と小碓とてまう。此亦
 の此名へ日本皇男曾て東と伐めんとて。能廣野（佐賀県）薨下りて因て
 と小陵と造る。此白鳥赤出て空小翔る故小棺と笑く小。衣冠のありと小於て
 との白鳥の止まる所と窺ひて陵と建大和の磐璽原。又河内の吉市是と白鳥の陵と云

まの尊始め難生ふ在りけり。帝異とて雅小結のひき。故小因く
兄と大雅とらひ弟と小雅と号けり。小雅と名ふるは名小童男と云。これ此
言の事なり。幼少うて雄果のふあり。杜るふおびて容貌小偉。才丈一丈あり。
力く鼎と扛ふ人とて。かくて尊十六果のおん時。熊襲背き。白王今小頃へは。
天皇小雅言とて。大將軍と云。是と平けり。あへん。尊の所と。後人預る。射
は老と。従へんと。宣ふ。或人。格といふ。美濃のふ。小。才。彦。公。の。ふ。あり。射。小。雅。と。
又。え。あり。彼。と。召。ふ。と。即。言。ふ。初。小。使。ひ。着。候。の。人。宮。彦。彦。と。遣。て。是。と。微。を。召。彦。公。
召。ふ。意。上。石。占。の。様。立。及。び。尾。張。の。因。子。の。猶。置。等。と。幸。て。来。り。尊。大。小。悦。び。の。ひ。那。系。師。と。
進。美。あ。り。て。後。多。熊。襲。の。ふ。小。着。の。ひ。あ。ふ。川。上。の。斛。師。と。の。ひ。の。あり。力。死。ま。せ。
強。く。て。然。日。着。屋。多。く。威。勢。強。大。し。九。尺。と。併。各。ひ。力。と。以。て。と。と。攻。身。士。年。と。多。く。

漬。田。下。計。策。成。り。て。あ。ひ。小。如。む。と。その。便宜。と。家。ひ。の。小。斛。師。の。夜。毎。親。族。と。集。て。酒
宴。と。あ。す。う。多。多。ひ。是。と。越。あ。れ。便。多。と。と。と。髪。と。解。さ。て。女。小。打。扮。衣。の。徑。小。知
と。隠。と。かの。宴。席。小。伺。ひ。入。り。婢。女。等。が。侍。小。難。や。居。の。人。かく。て。斛。師。の。と。と。知。び。例。の
如。く。礼。辭。み。普。く。坐。中。と。え。ん。と。ひ。小。その。面。い。も。認。ら。れ。と。腸。満。る。容。貌。の。女。女。の。あ。り。
とい。く。悦。び。多。と。欺。て。傍。へ。拒。れ。も。と。屢。杯。と。奉。て。その。飲。び。と。さ。ひ。や。ど。小。その。夜。も。稍。小
更。と。さ。る。席。上。や。ぐ。と。寂。や。う。あ。り。斛。師。の。今。の。月。と。記。し。女。女。と。抱。か。て。外。房。へ。入。り。小。雅。と。
い。斯。も。で。小。謀。を。謀。て。時。分。い。う。と。夫。庭。小。斛。師。と。更。居。て。抱。き。お。い。な。び。拳。と。堅。め。て。その。胸。と。突
め。斛。師。大。小。雅。と。怒。り。反。か。え。と。ま。と。と。日。懐。び。さ。ふ。於。て。と。め。く。汝。何。者。と。い。わ。の。ふ。と。
の。次。才。小。及。ぶ。名。と。名。と。眼。と。睜。り。て。言。ひ。と。死。言。茶。へ。て。日。是。天皇。の。ひ。子。小。と。そ。の。名。と。
日本。童。男。と。い。は。人。民。と。掠。略。し。皇。令。小。使。ら。び。似。て。謀。伐。と。加。る。と。又。て。斛。師。が。す。す。中。の。の。
間。の。人。小。及。ぶ。ん。七。日本。の。廣。し。とい。と。も。吾。小。故。き。精。力。の。者。と。威。と。揮。ひ。も。君。が。力。小。

克と能く謀せし君の英傑に陋しきによりかく言をいせけしと今日より
武と号する人とは休く息絶さう。かそ矛盾を遺してその所黨と平らげあり。西平治なり
けし。海路と渡りて吉備に到る。到る小の所小す。強神あり。是とも謀りて難波へ
到る。小拍の済ふ強神あり。もそ是とも謀りて民の決と除き。春二月の頃あり。東師
還す。そのこと具奏し。あひけし。天皇感涙。其功を賞ふ。小帝の四
十年夏六月の頃あり。東小大授礼。良民塗塗。小若むす。その認へあり。這回
の儀と將りて。その妻道と殊をき。と群はと聚めて。後。小群は。小強を序む。
爰小日本武宣ふ。臣高小九。小武。則師及び草紙と其て。既小國と清め。這回
大雄と將りて。その逆礼と強め。と。小大雄。小怖。と適。と。小中。小匿。帝。小是
と責め。且。暗弱と憤りて。美濃のふ。還。還。ひ。ぬ。手。時。日。が。武。宣。ふ。す。既。小。態。發。と。平。け。て
一。こ。び。天。下。と。清。む。と。人。と。も。も。東。夷。叛。小。所。て。大。平。何。と。の。目。と。期。せん。不。肖。あり。と。ご。も。り

もう。て。是。と。強。め。ん。と。あ。り。け。し。天。皇。殊。小。歎。ひ。思。ひ。て。斧。戔。と。持。て。尊。小。授。け。朕。々。く
東。夷。の。強。暴。し。て。凌。ぎ。犯。と。宗。と。あり。村。小。長。と。邑。小。首。と。あり。堀。と。食。と。相。攻。略。難。夷。と
い。と。甚。と。男。女。交。り。居。て。父。子。の。差。別。と。成。ひ。の。毒。箭。と。發。小。強。し。劍。と。衣。の。中。小。佩。と。し
小。登。と。小。飛。禽。の。め。く。草。と。行。と。小。獸。の。め。く。擊。バ。則。小。隱。と。追。バ。則。小。小。令。と。あり。故。小
性。昔。より。曾。て。王。化。小。服。と。さ。る。と。あり。朕。つ。り。と。汝。と。さ。る。小。月。野。長。大。小。容。貌。端。方。ハ。い。く
鼎。と。扛。げ。と。の。猛。と。雷。の。如。し。行。所。と。て。教。と。り。の。あり。向。小。所。勝。と。さ。る。と。あり。と。と。形。ハ
朕。小。し。と。其。ハ。則。神。あり。と。と。天。朕。と。不。能。と。懽。と。且。國。家。の。治。と。さ。る。と。と。懽。と。ひ。て。汝
と。降。し。天。業。と。終。と。し。ひ。然。と。と。の。天。下。ハ。汝。と。天。下。の。汝。と。位。と。あり。深。く。慮。と。遠。く。殊
と。て。甲。兵。と。煩。さ。と。と。懽。と。小。能。と。と。以。て。其。と。懽。小。令。と。と。人。の。教。と。領。兼。あり。則。軍。と
吉。備。の。武。彦。と。大。伴。の。武。日。連。と。率。と。既。小。東。小。赴。と。さ。る。と。と。か。て。其。の。道。と。枉。て。伊。勢。の。神。宮
小。詣。り。ひ。且。倭。姫。命。小。竭。と。と。の。と。と。若。人。倭。姫。命。草。薙。の。劍。と。持。と。さ。る。小。授。け。と。と



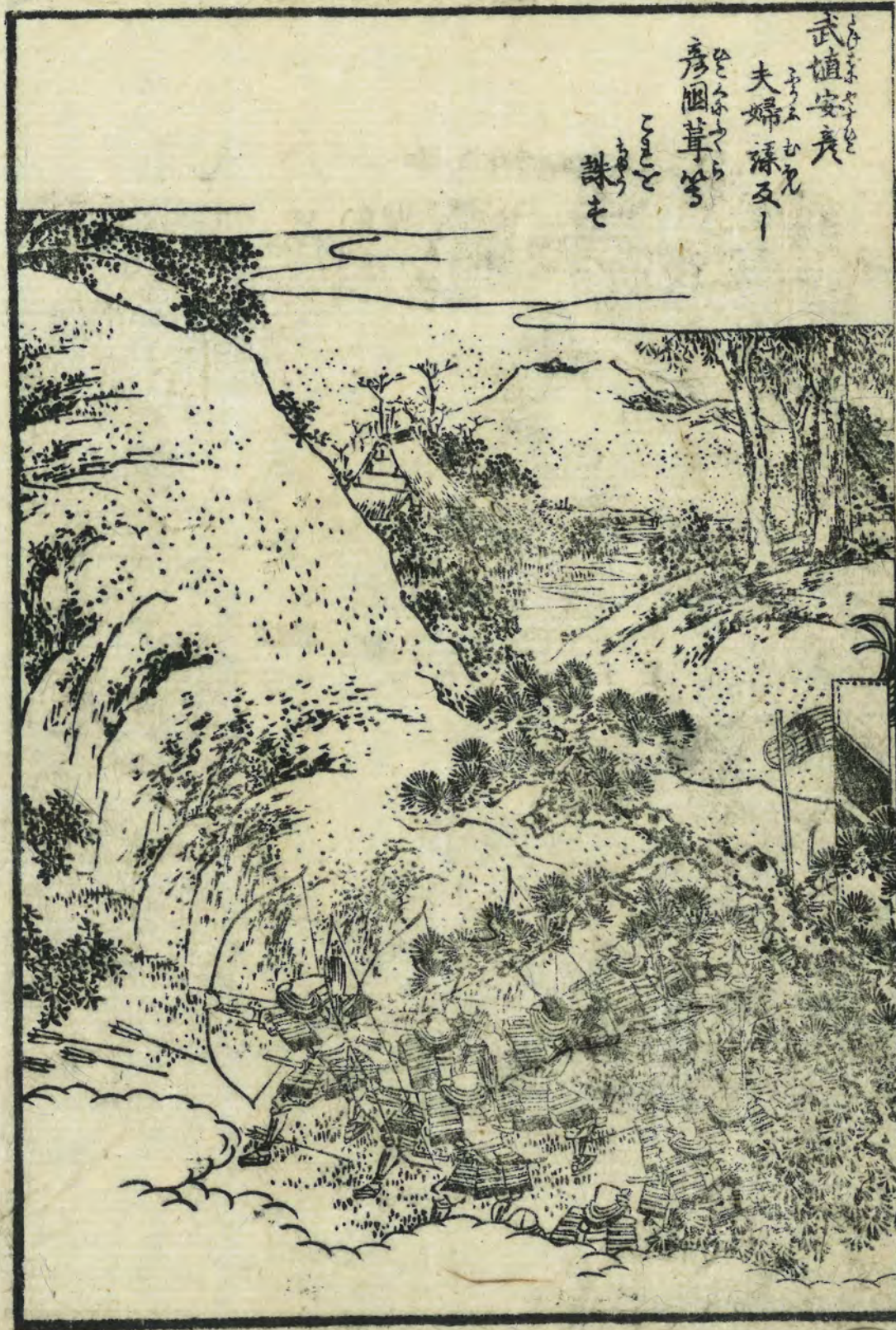
日本武尊
女賊
川上泉を
伐る



時小一人の少女
賊鳥鳩志齊
今怪に咎め
の歌と謡ふの
まにまに小花
倭迹三月百
たて思慮え
ふの土と
叛の強あり
誅叛を
誅叛を

同ハ俱ニ合^あフ
 五十狹^い芥^さ芥^や余^あ命^{いのち}と
 安彦^{やすひこ}と^や山^{やま}背^せ小^こ
 竟^{つひ}小^あ吾^ご田^ひ獲^と
 舊^{せう}兵^{へい}我^{われ}率^{しゆ}ハ
 河^かを隔^へて挑^{てい}
 練^{れん}叛^{はん}を突^{おこ}ス
 伏^{ふく}せと呼^よびて
 國^{くに}葦^{あし}の射^いる者^{もの}

武植安彦
夫婦謀反
彦圃草
誅



舊事記神名小
吉備津彦吉備

津姫と云ふなり

本文吉備津彦の
孝灵天皇の皇子

五十狭芥彦命之
弟稚武彦命也

吉備臣之始祖也

吉備津彦

年歴古く今

吉備津彦者 崇神馭寓遣將

軍於四道時此人為西道將軍

吉備と云ふは備前備中備後の總名なり應神天皇の紀あり
二十二年吉備不幸を吉備の國を割て御友別之と封じ川島縣を
分て長子稻速別と封じ是下道の遠祖と稱する
彦と封じ是上道長香底臣の始祖也三野の孫と稱て身彦と封じ是
三野臣の始祖也と云ふ有佐宮社傳小孝靈帝の三子其一ハ備前の二宮
其一ハ備中の二宮其二ハ備後の二宮と云ふ

武渟川別

吉備津彦

あめく將軍の任ふ赴きあひ不順りめと快國の政と捉て同 帝の十一年花洛
小渟里のひまより後郊い事なりある小月 帝六十年七月群臣小詔を
天孫の玉へ降降のとき武日照命が天より將來す一所の神宝今出雲
大神の宮小彥より朕と云ふと云ふ 詔を維と使とて是と齋一まらんや
とあまけりふ群臣對て武徳隅 夫田部造のこと 箇操のこと心得とて渠
御使とて一はせらるん然るべと言けり 帝の身小月ト多ハ則武徳隅
召てらるること命ト多ハ武諸隅詔とけり出雲小赴き初彼のよと述けるふ
時出雲氏の遠祖出雲振根とりり神宝のこと主とて在けるふ大の須江
へはて國あふびその身版入根とりりのことと兼りかこさ詔命と受る

讀羣書翌年作長恨歌琵琶行鈔解僉
言神童也因勸出家然掉頭歸家遍讀
四庫書二十二歲而所歷覽書凡四百
四十餘部從見多諳誦謁惺窩而偶床
上有論語大全開之乃問數條惺窩辨
拆之且曰所問我亦十餘年前嘗有此
疑以喜其志焉或曰讀春秋傳惺窩寄

書曰古人讀春秋於羅浮羅浮者是不
在羅浮而在足下明窻淨几之上爾後
呼道春稱羅浮山人此時旣二十三歲
也達識穎悟非常人也所著書百四十
餘部明曆三年正月廿三日卒年七十
五也曾著書中有本朝百將傳上古
神武東征之元帥始道臣命至于慶長

年間終豐公各雖俾附其小傳以便童
蒙矣然簡易而不能無遺憾故謀與浪
華書肆羣玉堂肇大書羅先生之文解
之國字間亦竊加新說畫圖以布世雖
然寡聞固陋啻恥大方之嘲云皆嘉永
甲寅陬月松亭迂叟題并書

日本百將傳一夕話總標目

○壹之卷

○道臣命
○大彦命
○武渟川別
○吉備津彦
○日本武尊
○御諸別王
○道主命
○上野八綱田
○武内宿禰
○大矢田宿禰
○田道

○武之卷
 大伴金村
 大伴狹手彦
 阿部比羅夫
 朴市多來津
 高市皇子
 村國男依
 大伴吹負
 大野東人
 藤原藏下麻呂
 坂上田麻呂
 ○三之卷
 坂上田村麻呂
 文屋綿麻呂
 藤原利仁

藤原忠文
 平貞盛
 藤原秀郷
 小野好古
 源紅基
 橋遠保
 源滿仲
 ○四之卷
 平惟茂
 源賴光
 源賴信
 源賴義
 源義家
 清原武則
 ○五之卷

源義經 上總廣常 十葉常胤 和田義盛 梶原景時 畠山重忠 土肥實平 二浦義澄 小朝政 佐々木盛綱 平泰時 足利義氏 平時頼 元之卷

源義光
藤原清衡
平正盛
源為義
平清盛
源義朝
源為朝
源義平
源賴政
平重盛
平教經
源義仲
源賴朝
七之卷

○十二之卷
 毛利元就
 北條氏康
 武田信玄
 長尾謙信
 齊藤道三
 織田信長
 織田信忠
 柴田勝家
 豐臣秀吉

日本百將傳一夕話全部十二卷總標目畢

日本百將傳一夕話卷之壹

東都

松亭金水謹撰

目錄

○道臣命
 ○大彥命
 ○武彥別
 ○吉備津彥
 ○日本武尊
 ○御諸別王
 ○道主命

○上毛野八綱田
○武内宿称
○大矢田宿称
○田道

以上十一將目錄終

永田姓



皇孫天押日
命ノ右
大伴氏之遠祖也

道臣命

人皇第二代神武帝の時の人
嘉永六丑逆 二十四百三十四年ニ成

道臣命者 神武東征之元帥
也 本朝武將之權輿乎

初め日比命とあり 神武帝東小國あるとてまろしめし軍兵
を起し征伐し多ひに克み大和を據る所なり 時命元帥の
撰ばざる元帥を依りし軍師なり 智謀勇悍衆小をくま
し君と補佐し草創の功とあること 則本朝武將の權輿なる
べし 權輿の作まらずといふ義なり

道臣命の詔

神武帝の御諱と神日本磐余彥天皇と申す。御父の青不合尊。御母の海童之
小女。玉依姫なり。此年十五小くして立てたり。日向の吾國邑吾平津
形取娶て死にたり。御年四十五歳のに時諸の兄及子等と聚めて豊葦原
瑞穗のハ高皇產靈宮。大日靈宮より。天祖彦火瓊杵乎小授けさる。一
圍りて。瓊杵乎天の國と聞き。雲路と披て戻止は。是時運路荒小属の草
味小種るふより。ふささと養ひて。西偏小治を。當下より。今不及びて年と歷る
る。二百七十九萬二千四百七十餘歳ありぬ。此小遠邇の地いまだ王澤小及
む。此小鹽老翁小言ふ。東小美比布。蓋六合の中心あり。人孰と都と定めん
と。思ふに。何小と宣ふ。諸の皇子。當理實あり。我も恒小是と想ふ。迷小行ひ
と。甲寅の歲。於十月辛酉の日。天皇親ら皇軍と帥ひて。日向と進發し。ひ

荒雲の雲崗の水門小あり。是より安藝小埃宮小居り。乙卯年。吉保小高。宮
小居る。乙卯年。とあり。丹城と備へ。兵食小蓄あり。戊午年。皇師難波の磯小
は。是より河内小草香邑と徑て。竜岡小赴んと。其諸嶺と並行とて。得る。う
膽物とて。諭ん。とあり。時長髓彦とて。穴。孔舎衛阪小徹。注む。皇軍これと。我
知五瀬。命流矢小中。甲子。皇軍大敗を。天皇深く憂へ。熟思慮あり。小
朕も。日神の妹なり。日向ひて。膚と心。天の道小逆まり。退きて。神祇と
日と負て。心さん。及小血。平々。と。群臣とて。然る。軍と續め。引
返り。故も。敢て。逆。かくて。軍と營へ。名草邑小至す。名草戸。群。妹。
熊野の神邑小至す。天。親。小食。軍と引。進む。知小海中。草
周起す。皇舟漂湯。時小稻飯命。飯と。拔て。海小入す。御持神と。化為。三毛入野。命。
後秀と。瑞で。常世郷小住。天皇。皇太子。手研耳。命。軍と師。熊野の荒



道臣令謀
 虜どもと伐
 皇居を
 檀原よ
 定む



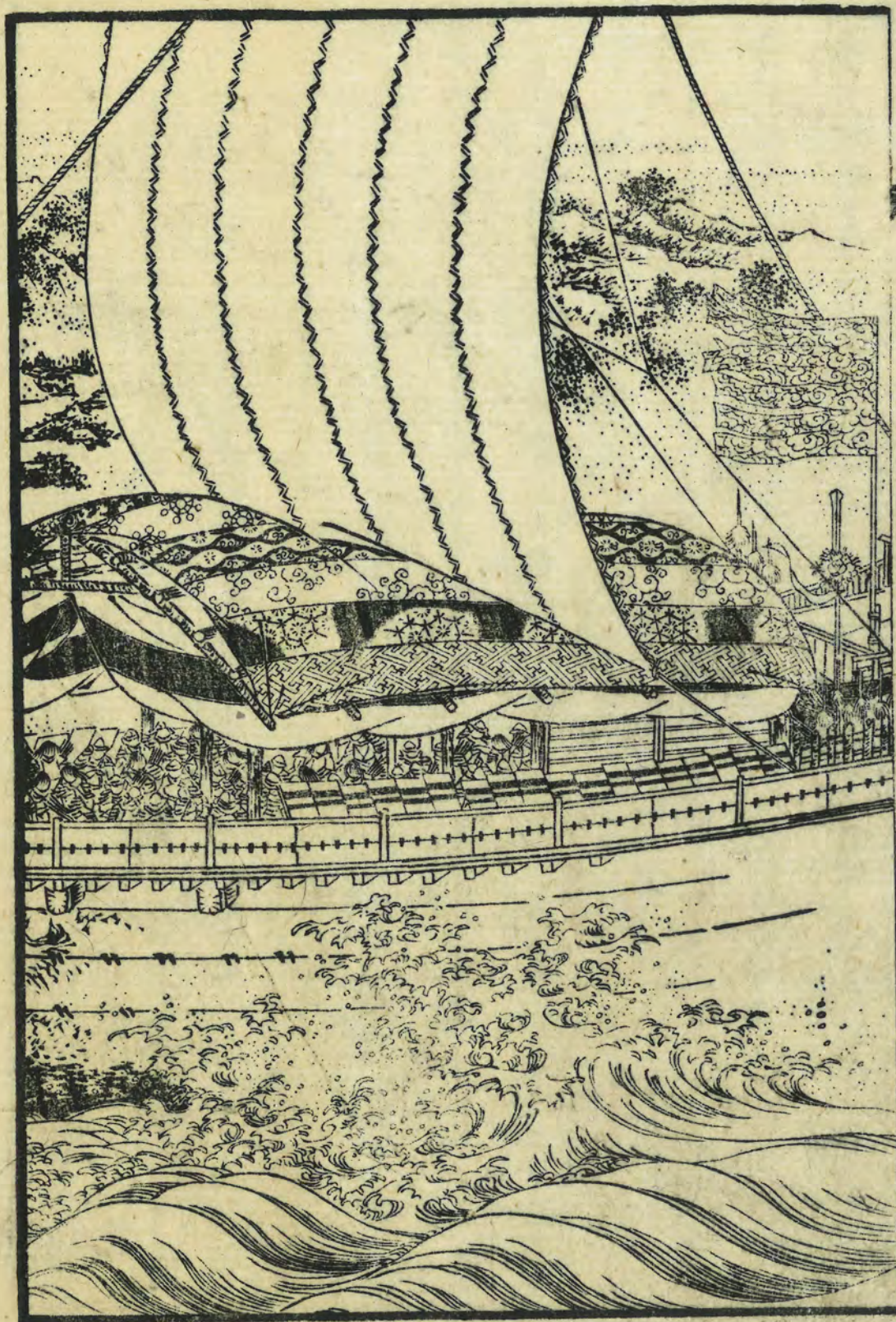
坂の津ふみで丹敷戸畔と練へし時小神毒氣を吐て人咸病小深む故小皇軍ま
進むとを得ば時小熊野の高倉下といふ人天照太神の夢想ふより庫の内小
得てこそと天皇小献る。その時天皇熟睡し人月を見てかの毒氣小中する軍
兵も癒ふ。因て皇軍進まんといふ小。倭絶み行べき道多。捷進てその
所をる。夜天照大神天皇小創へて因く。朕今頭八咫鳥と遣て郷守をさ
めん。若あ果て頭八咫鳥空より翔降る
謹按る。頭八咫鳥のと法説區あり。或いへ人の名と。また実の鳥といふ。是とも
神代小八咫蛇無名難む。といふ人の名あり。頭八咫鳥も是とある。期降といふ
も文の潤色之。賀茂縣主の遠祖建角身命の化する所ともいひ。神武紀
軍功と賞し。人條小頭八咫鳥も。賞列小入。其苗裔即葛野主殿縣主部
是也とある。實の鳥といふ。さるる。明け

その時日命元戎と率て鳥の向ふ所と作視て進て遂小菟田の下縣ふ。さて落行
け。因て日氏の功と賞し。あひて道臣と更め。かくて兄弟弟と徴ふ。小
弟得来す。うろ兄治め兵と操て皇師と防んと。然る。ふその威勢あ。を難と
知。表小帰順の色と彰り。謀とて天皇と撃事らんと。人預く。いよく備
あ。人といふ。意小。然て天皇道臣命と遣て。その逆状と記せ。め。人道臣
こそと。さる。小果して逆公ある。ふ。大小怒り責て兄弟と斬る。その所を号て菟田
の血承といふ。と。ん。かくて諸の虜どもと平げ。あ。八十梟と。因見え。岳小斬る。皇
軍大振ふ。その時天皇密小道臣小勅し。如此く虜を尽るといふ。その黨猶
く。その心測り難し。故大来月部と帥て大室と忍坂邑小化す。食宴を設て。是と
國と宣ふ。道臣詔とうけて。膏を忍坂小振る。猛卒を撰て。虜と難へ。居ら
る。酒酣小及び吾歌と誦ふ。是と相告る。虜を刺せと示し。合せ。就小誦

王宮と廻りて法小幸す。かくて皇后とらふ苗め。武内以下の卿大夫及び宿人を従えて南玉と巡狩し。紀伊に徳勒津に居る時、まゝ熊襲叛きけり。天皇とまじりて徳勒津を登りて穴門に幸み。又日角鹿の使を立皇后とめ。穴門におちて逢ひぬ。月秋七月皇后豊浦津におちて如意珠と海中おぼろへ。按る所のやえ珠のりたる珠也。前後お放る所あり。俗説小玉は于珠満珠といふ。あはれ新羅と伐りんとせし二顆より韓人など苦めるといふ説も知られず。なんぞその故に神代紀におき出見す哉。官におくまひ親お飯らんとするなり。潮満覆及び潮個覆と授かる潮満覆と倭に潮忽満たして以て汝兄と没溺せ。潮個覆と倭に則ち潮自ら個ん此と以て救ひ多く逼悩む。汝の兄自休めんとして豊玉姫より二顆の珠と授けり。本去へ飯中。此の如くあり。不圖降命危困さる。乃自ら罪小伏もと。久きと忍み潤色し。かの俗説とあるらん。然し是抄津小佐若

今日潮満潮涸の二顆の珠と神宝とて人より拜せむ。この新羅と倭の
 め佐吉の神願の事ひて示しあふてあまのまは原けるりのあやあふん邊をわ
 て致ふべし。是等安益の辨あるとて童蒙のさふ小記をのこ
 あふ神あま皇后小告いそ。然然と藤の空ふ貴女と奉て代不足らんや。この
 小愈る宝の星あり。金銀多不在。是と持余新羅のふとる若者と余のあふ
 繫らば。是をゆえと。示現あるふうんそのと。天皇小奏しあふ。天皇是と信ふ
 び。さうさ。爾のさふ暇ふえふ。さふ然然と代へ計策とて。神も皇后小
 社にその神言を用ひあふ。竟ふ汝偶るこあふん。然る皇后始めて胎めうそのみ是と
 獲ふふと。行神の告あふ。天皇更ふことと信ぜ。然然と代あふ。天皇九年
 春二月。忽ち痛ふひて明日崩す。あふ式いそ。天皇親然然と代て。賊久中ずあふ
 とのふ。さふ皇后武内大臣とて。信ず。軍兵ふあふ。あふ。容不中臣鳥依連大

皇后の
大船を
大洋を
三韓に
到る



三輪大友主君。抄部。昨連大伴武以連。おのころとて。引。則。而。寮。と。願。て。宮。中。と。守。ら
せ。竊。小。大。白。主。の。屍。と。収。め。て。海。濱。に。送。り。て。穴。門。に。送。り。て。豊。浦。宮。に。燒。た。武。内。宿。禰。の
と。と。復。送。り。給。へ。の。と。と。執。行。の。ひ。き。後。穴。門。より。還。り。來。り。て。皇。后。に。復。命。し。ら。の。年。新
羅。の。役。小。う。て。天。皇。と。華。ら。び。と。せ。か。く。皇。后。天。皇。の。神。託。と。信。ぜ。り。て。崩。れ。の。人。と。喚。び
の。ひ。親。神。主。と。あり。の。ひ。武。内。宿。禰。に。參。り。て。按。せ。鳥。賊。津。連。と。審。神。
と。り。千。僧。高。僧。と。を。て。祀。り。の。人。と。し。新。羅。と。代。と。告。め。ひ。る。神。の。知。り。て。
然。ら。ば。給。ふ。祈。み。一。教。へ。の。陸。を。と。室。の。玉。と。代。べ。と。商。議。定。し。鴨。別。と。遣。は。て。然
然。と。擊。ち。あ。り。尋。で。羽。白。然。勢。と。土。師。味。田。油。津。媛。の。決。賊。と。謀。り。ぬ。皇。后。武。内
以下。の。群。臣。残。後。へ。松。浦。の。縣。王。島。邑。小。川。の。渡。に。幸。す。一。釣。を。垂。て。振。ひ。ひ。ひ。小。果
と。之。鮎。の。魚。か。き。り。皇。后。大。に。悦。び。の。ひ。擲。日。浦。に。還。す。の。ひ。海。に。振。ひ。ひ。ひ。回。く。新。羅
と。代。て。克。べ。く。の。髪。分。と。て。二。ふ。と。と。儻。人。海。に。泳。ぐ。人。と。い。ふ。眞。實。な。事。と。二。つ。と。ある。便。也

西。の。群。臣。と。偕。ひ。男。壯。お。お。扮。て。親。斧。弒。と。執。り。の。ひ。法。軍。に。令。と。傳。へ。る。脱。お。發。せ。んと
志。の。人。時。適。同。胎。の。時。お。愛。す。ぬ。ら。お。於。く。石。と。拾。ひ。腰。間。に。使。て。新。羅。と。代。ま。の
土。へ。還。す。て。舟。に。上。り。と。祝。し。の。ひ。和。拜。津。より。議。と。り。て。お。さ。る。海。中。波。風。暴
と。り。と。も。救。百。の。大。魚。浮。き。出。し。船。の。お。後。左。右。と。護。り。と。お。於。て。恙。な。新。羅。の。小。へ。臻
で。の。ひ。の。國。人。見。て。祝。て。お。事。の。云。と。解。さ。び。近。より。ま。お。救。百。の。軍。艦。旌。旗。目。お。暉。さ
鉦。擊。霜。の。め。鼓。声。天。に。震。ふ。是。ぞ。正。ま。く。及。ぶ。東。の。小。の。神。兵。と。う。んと。大。に。發。さ。る。く
お。敵。を。べ。く。ぬ。と。悟。す。る。而。傳。り。て。迎。へ。降。す。設。令。大。陽。西。より。出。陽。緑。江。朝。鮮。送。流。す。と。も
朝。貢。と。願。と。り。舟。揖。と。乾。さ。び。馬。梳。馬。鞍。と。天。庭。の。隸。に。獻。さ。る。後。世。子。孫。の。盟。と。論
バ。天。神。地。祇。共。お。延。罰。せ。んと。大。に。振。言。ひ。て。之。け。と。い。皇。后。杖。せ。る。所。の。子。と。城。門。に。掛。て。平
と。り。の。人。新。羅。王。の。實。後。と。て。來。つ。て。是。と。質。す。一。の。年。毎。お。船。八。十。艘。お。く。以。て。定。額。手
高。廉。百。濟。の。王。と。も。の。由。と。以。て。伺。ひ。る。お。兵。勢。い。と。も。熾。る。と。い。ふ。と。ま。さ。大。に。恐。怖。と

あり自ら管外お来りて降と乞ふ。西蕃と称して朝貢と絶トしむ。其の故は、
皇后のまゝ彼等の國籍及び金銀財帛と把收め王の面縛と赦し多し。かの人質以客
實の波沙寐修とを私にお新羅の王とあり。微叱已知といふ二人の名。かくて其年の十二月皇
后新羅より還りて多し。新羅の爵級とある。西蕃と稱する。其の故は、
神天皇すなはち是なり。

國史略と按ずる。時倭朝と謂ひて云々とあり。故にその号ありとぞ。此天
皇胎内にお在りし時母后の戒禁お成りし。侍上の穴隆紀とあり。勅の由あり
よき事と。性昔の貌あり。まゝ吉祥ありと名とせり。性にお古記あり
かくて明年二月お至り。天皇の惑と発して群卿百寮と後へ。穴門の豊浦お
移りて海路と系師へ向いんと。仲哀の皇子廣坂王忍熊王宿理とあり。皇
皇后脱お新羅と伐荒荒お皇子とあり。系師へ凱陣とあり。その皇

みとて必後お即とまゝん吾と兄とて弟お後ふの理ありんや。若ト皇后と皇
みとて途お伏て收り。帝後お即んと商儀なり。先帝の爲お陵と作すとあり
志と播磨へ出。船お渡りて淡路へ至り。其島の石と運びてと興。是にお大
上組。倉見別と吉師の組五十校茅宿松と見お供。東の兵と募る。あお廣坂
忍熊の二皇子。荒賊野においり。将となり。遠田の吉山おトくと。則彼処にお到り。
假殿お構えとてお居り。若事成ば良歟と獲んとお祈ひくことと。俟お忽地お死
野猪あり。假殿の上へ跳り登りて。廣坂王と咋ひ殺す。在あの人を後と殺す。故に
とさるふその例あり。初め猪の鼻端と咬き荒おありて。狂ひ廻り。忽然とて死す。後
の怪異最容易とねど。忍熊王の倅とせび。その倅も死す。とて兵と率く。後
屯。以て皇后の船と侍皇后あり。一とあり。武内お命。いかに。懐
懐とあり。南の方紀修と小廻と吾の難波へ赴く。直お船とあり。皇后の船

海中と廻るのくみ進まねば皇居怪し攝津なる。務古お作るの水門不還りす。こと
 トりめあふ。天照大神及び稚月女等事代主命も表箇男中箇男底箇男の三
 柱の神。その然るの示現あり。因てまゝ不還する人。その内能平らふ不海と度ること
 得る。忍熊王の軍と引荒道不到りて軍を皇居見より死守ふ不幸す。太子小倉
 一の月高小在て軍議せり。小竹の宮小遷す。かてこの年三月五日。武内宿禰と武
 振然と小救万の軍兵と授けり。忍熊王と伐あり。武内等二人の將軍を引揚
 とて隊伍と乳まひ。山背より小出て荒道の河の北小屯。此時忍熊王の先鋒と然
 嶺と入り。是の月夜、備とて敵の陣小うち向ふ。あの時武内宿禰心中小一つの奇
 計と巧み出。三軍小令て曰く。各々備法と警小隠。木太刀と佩く。急出。計策の
 箇様とて密小下知せ侍ふ。軍勢各急と得て下知の如く小打合せ。忍熊王も然
 之嶺と先鋒小進ませ混と陣と張て押する。武内宿禰大急あ。臣皇居の命あり。

三軍と帥人君以迎ふ。更小勝劣と争ふ。先より居見ふ。登田皇子も
 勇かり。争う拒と戦えん。臣等が願小斬へ幼主と懐け居小後ひ和親と
 斗る他侍らば。然る君の是よりて天業と食め。席と安く枕と高し。万機と掌
 小握る人かく言ひ。処侍る。則ち其の能と見せならん。軍中も令て。法
 絶佩る太刀と斬小脱去す。水中へ投下け。忍熊王は是と見て。侍の皇居
 侍も黒心小あ。然らば此方小異公る。表せとて諸軍小令。法と絶せ
 佩る太刀と悉く。荒道の川際へ投下。更とつ。武内小破。下知傳
 不。法軍の警の程より。かの儲法と取。ち。ち。真刀と佩。因て揚
 攻。忍熊王へ。小助め。その欺とて。千回悔め。甲斐。倉見分と
 五十校茅小向ひ。脱小欺。他小援。兵。宣戦。とて得んと。軍と引
 納小退。武内へ得。や應と。精兵と進め。と射。雨より。備。小

大矢田宿松の結

一書ふいそ 神功皇后新羅のふと伐るふと。大矢田宿松と矢降となり。鳥賊津連
二陣となり。かの王へ攻入るふ。新羅の君臣皆うろ。必ひ倭とあるは虎と生捕て強
籠ふ盛で。牧日が同食と共え。虎の大ふ肌ふ膝む。貴下大矢田が。後陣より。こまに
放ちて。彌を打ち。軍中へ。拉り。まふぞ。倭軍の大ふ怖と。惑ひて。二陣敗。まふ。及び。て。鳥賊
津連援兵と。て。大ふ。夫賊と。怪し。竟ふ。勝と。を得。う。と。記。せ。り。然。ま。と。も。実。記。と。接
ず。ふ。更。ふ。合。戦。の。事。実。と。載。せ。ば。その。是。非。孰。と。も。辨。へ。が。ず。故。ふ。と。ある。と。て。奉。て。識。志。と
俟。の。と。も。こ。前。文。ふ。大。矢。田。と。雷。て。新。羅。と。守。ら。れ。と。の。一。説。ふ。新。羅。ふ。雷。て。後。欺。と。て。
死。う。り。の。大。三。嶋。真。鳥。と。ま。後。と。ま。代。り。て。新。羅。ふ。の。千。熊。長。彦。百。濟。ふ。の。斯。摩。宿。松。
高。麗。ふ。の。葛。城。の。裴。津。表。の。三。人。と。宰。と。雷。め。ふ。と。の。人。と。る。と。う。但。目。本。紀。私。記。ふ。回
く。宰。へ。令。持。天。皇。之。御。言。故。ふ。美。古。止。毛。知。と。削。む。と。の。人。

田道

人皇十七代 仁德帝の時の人
嘉永六丑迄 千四百七十五年ニ成

崇神天皇弟一
皇子
豊木入日子命四
世の孫
荒田別命の子
也
上毛野下毛野
居等の祖

田道者 仁德時討新羅有功其後
攻蝦夷不利戰死其靈化成蛇夷
人來過者多被毒殺

按むるふ人死多て。死散。り。そ。途。あ。れ。り。の。常。理。あり。然。る。ふ。田。道。が。死。た
死。後。其。と。現。れ。て。報。と。報。る。の。間。と。あり。或。説。ふ。い。え。魂。の。大。虚。ふ。飯。る
遲。迷。る。と。能。へ。む。と。と。バ。燈。烟。衝。上。て。漸。と。ふ。去。り。煙。も。凝。結。す。
処。厚。さ。り。の。遅。く。落。さ。り。の。速。故。不。枉。羸。病。死。の。者。の。結。氣。足。て。方。ふ。死
に。死。迷。ふ。散。れ。た。死。然。と。得。さ。る。う。と。の。率。ふ。消。耗。せ。り。其。後。と。状。と。い。ふ。

田道の結

仁徳天皇五十三年夏五月。新羅頃歲朝貢其故。上毛野君祖竹葉瀬とて新羅
小住し。その罪と問せ。然る小竹葉瀬治ふ。於て二頭の白鹿と得。う。と祥瑞の獸
ある。捕へ還す。天皇小献る。

按る。小延喜式祥瑞の篇。小い。白鹿へに鹿あり。以て祥瑞とる。天皇の仁徳天
小達し。その鹿と顯はる。人

かくも。目と更め。新羅へ至る。朝貢の國。故と問明む。ふ。かの小人皇。今小順
い。よ。と拒む。ある。と。その由。具小奏。問。け。天皇大。怒。らせ。ひ。竹葉瀬の
弟。ある。田道。今。ト。破。如。注。む。若。新羅。い。距。ま。兵。と。率。て。伐。下。と。精。兵。と。授。け
ら。田道。と。や。う。小。領。承。し。て。筑紫へ。至。る。船。と。浮。べ。て。新羅の。玉。へ。赴。く。小。果。し。て。か。の。小。大
小。叛。る。田道。が。来。る。よ。と。空。て。堀。と。深。う。一。里。と。ま。う。合。戦。の。准。備。と。る。田道。も。又。と。是

け。と。三。軍。小。令。し。陣。と。張。つ。て。遙。小。控。へ。故。の。動。靜。と。窺。ふ。小。更。小。戦。ひ。と。挑。ま。後。に
此。方。も。安。ふ。と。動。さ。し。封。陣。と。さ。教。目。小。及。び。甲。雄。の。若。武。者。等。の。退。屈。の。あ。え
え。と。や。故。の。お。よ。う。一。戦。小。端。潰。し。日。本。の。武。勇。の。や。と。示。さ。し。の。と。待。た。る。小。夜
風。雨。の。烈。し。と。小。乗。し。夷。賊。率。小。あ。め。き。て。田道。が。陣。と。蔽。ひ。る。破。勢。夜。撃。と。そ。入。れ。と。
周。章。狼。狽。大。方。あ。る。と。馬。よ。と。言。ふ。間。小。夷。賊。の。得。し。と。陣。中。と。四。面。八。方。小。端。荒。し。當
は。と。幸。ひ。切。る。然。と。も。田道。が。軍。兵。未。一。人。受。け。の。兵。と。迷。小。は。と。と。と。と。小。對。ひ
令。と。惜。ま。し。防。ぎ。戦。ふ。田道。も。自。う。奇。賊。と。執。て。陣。以。小。跳。出。新羅。の。將。と。戦。ふ。と。千
余。合。め。て。勝負。と。決。せ。ん。か。と。さ。か。と。小。東。方。白。し。秋。も。あ。の。と。明。日。と。新羅。勢。の。金
と。城。中。に。引。揚。る。と。さ。も。殺。筒。夜。の。戦。ひ。小。勞。と。さ。と。更。小。も。逐。と。相。引。小。人。陣。と
取。り。底。負。死。人。と。点。檢。さ。る。小。多。ひ。の。外。小。多。う。け。ま。倭。軍。の。大。小。力。と。夫。小。新羅。勢。其
機。と。新。日。と。戦。ひ。と。挑。む。と。小。倭。軍。も。さ。く。練。と。設。け。内。小。是。と。挫。ん。と。勢。ひ。勢。と。夷。撃。と。小。新

田通の
巨蛇と
東夷を
戦ひ殺す



らさ 羅の方より秘術をそ。方便とて戦ふやふ。何れも果下とも思ひまは田道熟なり。
この分を月日を送らば高瀬河の両面より後の兵未だ終ていれぬ。羅方より
も且く軍を往め味方の士卒の英氣を挫き。筑紫の兵とも折くべし。陣を隔ちて固く守
りて出合はれ。新羅の軍兵倭兵に取らばと侮し。日く戦ひて挑めとも倭軍の
もはやくつて。その陣所より獲る。當下新羅の新兵一人味方へ渡りて。田道
軍監を命し。渠と捕へて。東末まで。のう早く軍監へ馬を馳せ。羅方捕へ。田道
居る。田道は渠を縛り。自ら解く。大に痛む。さる軍中の消息と問ふ。かの百術が軍死
我軍中より百術との三韓云々の勇気の者あり。さる頃。勝てるといふ。かの百術が軍死
あり。常小陣の右と渡る。さる避く。戦ひぬ。必勝とんといふ。さる田道へ渠を厚く賞し。且く陣
中より止め。あは。法軍中より令と傳え。故の由と候。処果し。夷城備とて。関と揚て。終ひさる。倭
軍もさる。関と合せ。還兵。勝て五百餘。新羅の陣の右と撃。さる。かの百術士卒
軍

と地出つ。た。運。結。め。左。小。術。を。奮。撃。突。戦。遂。同。あり。折。さ。さ。り。ま。と。後。終。と。勝。や。終。と。候。
備へる。千五百餘。移。と。美。田。あり。田。道。自。り。中。央。小。備。へ。新。羅。勢。が。陣。の。左。へ。三。三。小。攻。
蒐。面。も。揮。を。お。て。か。ま。る。夷。城。大。小。狼。狽。に。雲。時。に。挑。と。防。ぐ。り。の。う。ろ。悩。ひ。さ。る。引。
退く。田。道。の。急。小。下。知。成。なり。此。れ。の。法。を。彼。處。の。切。所。へ。遂。蒐。遂。法。故。と。斬。と。時。の。同。小。
二千餘。級。の。程。數。日。勝。終。つ。る。新。羅。勢。も。今。日。の。軍。小。味。方。大。半。撃。と。つ。て。遂。と。城。中。
へ。逃。び。て。入。り。入。る。一。舉。小。城。を。屠。ら。ん。と。勝。小。東。と。倭。軍。遂。さ。り。逐。や。と。小。三。韓。小。
名。を。得。り。百。術。も。終。小。討。死。と。さ。る。う。り。ま。の。其。餘。の。賊。勢。以。い。討。と。或。は。降。人。小。出。け。る。と。
新。羅。忽。地。平。定。か。の。降。人。と。倭。陣。小。川。甘。泉。の。人。飯。系。の。け。ま。の。帝。獻。感。滿。り。以。厚。さ。
恩。賞。と。行。り。終。小。五。十五。年。小。遂。つ。て。幡。夫。叛。て。授。札。を。固。く。ま。る。田。道。小。命。し。あ。ま。と。
撃。り。め。ひ。る。田。道。部。令。と。得。て。進。發。し。陰。奥。へ。赴。く。小。蝦。夷。の。あ。り。官。軍。の。下。向。と。さ。る。と。
及。び。東。の。決。と。牒。し。合。せ。防。ぎ。戦。ふ。小。備。と。さ。る。景。行。帝。の。詔。小。蝦。夷。の。兵。未。曉。勇。あり。

草小庵と山小入る君は又子の差別あるは荒夷あるふより謀こそ拙みけし射れとも
突ども倅ともせし死生不初の完賊あるは田道も旅攻徳とて暫く軍と纏め熟思ふ
小祈のゆく故地へゆく素入てえよう土地の素則不誅し若前後より殺し撃れは迅速
の度と夫ふへ若し一まつ陣と引て故の虚と窺ふめいと遠くこそ引退き下統の園小屯
より當下蛇夷大ふ起て上統の方小在とて其賊と平けて後陸奥へ向むと諸軍
小下やと上統へ赴とるもむねむ敵方の夷賊ども蟻めや小聚するも田道の血氣の猛りあり
鳥合の草城ゆやどとあると軍兵と三隊小分て群やする故の中央へ割て入て
ふは戦ふる利便とて麻売と難かめ小軍城を以撃とめし泳指小嶺ともいひ
に漢ともいふに浦の泉のゆくそも中へ踊り出成りう撃を放ちけて夷撃と
いと急なり。田道の公剛もども金石の身小ありは獲小殺多の交うけて流る血を
故郷へと取るべき道あると何の御とるもそふ赤み流とて倅ともせし四角八面小破る

威勢宛然仙王の荒る如く牙以嚙と髪逆立て飛ちのよく奮撃突戦あり
けと倅多多く討ちて他は援を兵あり。竟小乱軍の中小余と隕れ夷賊はいやく
勝小乗あて田道と陣と端破る大ね肌小付とて残黨全うする慣ひ討ちて一軍兵
等右往左往小散れと頼小軍の法よりなり。かくて倅率主君ある田道と死に収むるは
あゝ纏ふそのも纏射撃の具和名と把て這小落伸ひ見と田道と妻小共多と討ちのやふ
若し一夫妻の大悲と歎きと纏と抱きと在ける頼小纏まで死うける見受ふ人貞烈
あると賞てとさるる流さるるのあり。さて田道と空と屍の一人一塊のふみ封と
印の松と植めけける夷賊等とて成敗するも果たぬありとて親族多く討れろ
屍と更へ出若うちてその然とと暗さんと殺百人うち集ひぬと田道と家と握るそ
屍と掘出小豈計らんや随より廿尋所の巨蛇ありと火燭と吹とて眼と怒れこ
集令一蛇夷等成ひい咩ひ成ひい蕞一成の毒氣と吹かるとぞ勝とめ死逃人と

五髭疎を動かさば。さきく作は依て。今世助るもの西三人通を
 こまを信すつた。云々。思ふ人。さきく志の剛なるもの。既ふその身は死せうとい
 ども。其終止するの儼と報さる。古今ふその例少あり。い
 按ふ。小田道雄。其以撃軍敗れて。伊寺水門に死せし。日本書紀ふる。伊
 寺水門に上総ふ。其儼郡とある人なり。

日本百將傳一夕話卷之壹



大日本帝國西海道肥州
 熊本左

金川家用物